

キッズ・ラジスタの普及のためのガイド

0■はじめに

キッズ・ラジスタは、子どもが自分でラジオ番組作りを目指していくなかで、電波や放送のしくみについて理解し、コミュニケーションの技術を身につけ、地域社会との関わりを見出してそれを深めることができるようになるための Web 教材である。平成 30 年度子どもゆめ基金（独立行政法人国立青少年教育振興機構）の助成を受けて、NPO 法人市民科学研究室が作成した。

キッズ・ラジスタは子どもが自分で[ホームページ](https://www.kodomoradio.net)（<https://www.kodomoradio.net>）にアクセスして自分で学習を進めていくことを基本にしているが、より実践的かつ体験的に学びを深めていくためには、子どもの教育に携わる指導者（学校の教員や子どもへの啓発・支援活動に従事する諸団体のスタッフら）が、キッズ・ラジスタのコンテンツの構成や中身をよく把握して、例えば以下に述べるワークショップのような形で、子どもたちが互いに議論し共同で“番組”という作品を制作していきけるような、“舞台”作りを行うのが望ましい。それは、一般の「授業」にみられるような、指導者一人が設計して完結できるものではなく、例えば子どもたちが行う取材にあたっては地域の諸団体や人々からの協力をとりつけることが求められるし、「理科」「社会」「国語」の枠を超えての知識や技能を扱うことにもなる。そして何より、地域のコミュニティ FM との連携をよい形で築いていくことで、キッズ・ラジスタでの学びが本格的なものとなる可能性がある。すなわち、よりよい地域社会を作るという作業に参加する、主体として自覚を、子どもが「放送をとおしてメッセージを発する」体験から得られるようになる、という可能性である。

以上のような高邁な目的を念頭におきつつ、ここでは指導者向けに、キッズ・ラジスタの効果的な活用方法をいくらか系統立てて解説する。

1■キッズ・ラジスタの全体の構成と各章の狙いの把握

キッズ・ラジスタは、「ラジオを知れば、身の周りの電波のことがよくわかるようになる。ラジオを“体験する”ことで、人の話の聴き方やしゃべり方も分かり、レポートやプレゼンの仕方のコツがつかめるようになる。そして地域の人々の暮らしが見えてきて、地域と自分との関わりを考え、コミュニケーションがとれるようになる」をテーマにしている。そのテーマに沿って 10 個の Chapter からなる「ドラマ仕立て」で進行する動画を、基本コンテンツとしている。そして、学びの対象を中学生と高校生に想定している。このドラマの登場人物たちも 5 人のうち 4 人がその年齢層となっている。

各 Chapter は以下のように構成されている。

- 1) **導入となる動画**（登場人物たちの会話）

- 2) それを受けて、子どもたちにクイズを出す「**考えようタイム!**」
- 3) その解答(「**考えたーっ? それはね!**」)を受けて、より深い知識の習得につなげる「**読んでスッキリ**」(独立したコラムとして読むこともできる)
- 4) さらに、実践的な取り組みが求められる Chapter にそれぞれの課題を配した「**やってみてスッキリ**」(Chapter4,5,6,8,9 の 5 箇所)

これらをまず一渡り視聴し、読んでほしい。自身が生徒になったつもりで、「考えようタイム!」の問題を解き、「読んでスッキリ」のコラムを読み、「やってみてスッキリ」の課題に取り組んでみてほしい。

2■教室での授業時間を想定した実施案

キッズ・ラジスタの全体は、大きく次の3つの区切りを入れて扱うことが可能である。

- I) Chapter 1~3: 情報伝達と放送の歴史、電波と放送の仕組み、ラジオの楽しみ方
- II) Chapter 4~7: 放送局の実際の姿の見聞、番組の企画書作り、アナウンスの練習
- III) Chapter 8~9: 実際の取材、番組シナリオの作成

それぞれに、最低で1コマ(50分)、可能なら2コマをあてることが望ましい。実際に取材するとなるとその取材の現場に赴くことになるので、そのための時間が必要だし、また、実際に地元のコミュニティ FM 局を訪問することが可能となれば、特別な時間編成を要することになるだろう。

3■ワークショップ形式で行う場合の留意点

進め方は、少人数(3人から6人程度)のグループをいくつか作って、子どもたちが議論しつつ、自分の意見を付箋紙に書き、それをとりまとめて発表していく、というワークショップ形式が望ましい。企画書を作って取材に臨む場合は、企画内容ごとに子どもたちを少人数に再編して現場に赴かせる必要があるし、コミュニティ FM 訪問が実現すれば、当然のことながら、了解がとれた場合でも局内にはごく限られた人数しか入れないことが多いことを心得ておかねばならない。「少人数チームでの番組作り」を念頭において、常に議論しつつ意見をまとめさせるようにしてほしい。

キッズ・ラジスタを授業で導入する際は、最初に、子どもたちに以下のような問いかけをするのがよいと思われる。というのは、私たちの経験では、現在中学生くらいの子どものためにラジオに実際に自分で耳を傾けたことがあるのは、約半数にすぎない、と判明している。したがってまず、ラジオそのものに触れる機会を提供しなければならない。

話し合ってみよう!

- 1●ラジオを聴いたことがある?
- 2●どんな番組で、どんな内容だった?

- 3●好きな番組、よく聴いている番組はある？ どうしてそれが好き？
- 4●勉強に使ったことはある？
- 5●周りの人でラジオをよく聞いている人はいる？
- 6●ラジオってテレビやインターネットとどう違うんだらう？
- 7●ラジオについて何か不思議に思うこと、気になることはある？
- 8●ラジオはどんなことで世の中の役に立っている？

次に、各章で留意すべき点を記す。

Chapter 1

ここで提供している「読んでスッキリ (1) 声を伝える技術・ラジオへの道 (その1) テレフォン (電話)」「読んでスッキリ (2) 声を伝える技術・ラジオへの道 (その2) 放送する」は、貴重な歴史的な写真も含めて、大変内容豊富なものである。情報伝達メディアは、現代社会の隅々にまで行き渡り、あまりにもあたりまえになったがゆえに、その歴史的な変遷について考える機会がかえって乏しくなっている。ラジオという具体物を目の前にして、情報伝達の技術がどう社会を変えてきたか、また今後どう変わるのかに目を向けることは、この高度情報化社会に生きる者にとって—“文系”“理系”を問わず—、貴重な時間になるはずである。この「読んでスッキリ」の写真などを投影しながら、生徒自身に「声を伝える技術」の歴史を考えさせる教案を作ってみてほしい。

Chapter 2&3

電波利用が著しく進み、誰もがスマートフォンを使用するようになった社会であるにもかかわらず、電波そのものの学習する機会は乏しい。ここでの「読んでスッキリ (3) 電波ってなんだらう」「読んでスッキリ (4) 電波のこんなこと、あんなこと～電波を使ったいろいろな簡単な実験の紹介」「読んでスッキリ (5) 放送で使う電波の話」はそのミニマム・エッセンスとなる知識を提供している。実際に教室で、指導者が生徒の前で「ラジオ工作キット」を使ってラジオ受信機を作ってみて、アンテナの長さや方向を変えたりして実験してみるのもよいだろうし、生徒になんらかの機会に「放送博物館」を訪問するよう促すこともできるだろう。子どもがスマートフォンを持っていて、アプリのダウンロードができる環境であれば、「読んでスッキリ (8) ラジオをより楽しむためのアプリの紹介」で紹介している、種々のアプリを実際にその場で入れてみて使えるようにすると、子どもたちの興味が一挙に高まると思われる。そこで紹介している radiotalk は自身でまるで Youtube に動画投稿する要領で、自身の声や語りをその場で録音してネット上に掲げておくことができるアプリであり、適正な使い方を指導する必要はあるものの、子どもたち自身が非常に使いたくなる

ことは間違いない。自身のアナウンスのチェックにも使えるので、Chapter 6 での学習に直接用いることができる。

Chapter 4&5

この章の眼目は、子どもたちに実際にラジオ番組を聴くことの楽しみを体験するなかで、番組表を上手に活用することを覚え、実際にラジオ局にリクエストメールを送ることで、「地域の放送」を身近なものにしてもらうことである。Chapter 4の「読んでスッキリ」では「(9)番組表の見方」「(10)リクエストメールの出し方」そして臨時災害放送局のことも解説した「(11)コミュニティ FM とは」を入れ、「やってみてスッキリ」では実際に投稿フォームから、子どもたちの実践の報告を受け付けるようにしている。

また、Chapter 5では「読んでスッキリ (12)企画書の作り方」を示し、それをふまえて「やってみてスッキリ」では、実際に子どもたちに自身が通う学校や地元の話を取りあげて企画書を書いてもらうことを促している。

これらのコンテンツを活用しながら、授業のなかで、

- ①地元のコミュニティ FM 局のホームページをスクリーンに投影して、その番組表の読み解き方を生徒たちの発見させていきつつ、いくつかの番組の放送をリアルタイムで少しだけ聴いてみる。
- ②コミュニティ FM とは何かを伝え、番組表からどんな「地域性」が伺えるかを考えさせる。
- ③「もしラジオ番組を自分で作るとしたら」という前提で、子どもたちに企画書にしたいテーマをいくつか決めてもらい、そのテーマごとにグループを再編して、企画書を作ってもらおう。

といったことを実施するとよいと思われる。

Chapter 6&7

Chapter 6では、天気予報を題材に実際の音源を用いて、「素人のアナウンス」「プロのアナウンス」「(自身で録音しての) 自分のアナウンス」を聴いて比較できるように工夫している。そのために「読んでスッキリ」では「ラジオ番組での話し方」を示している。また Chapter 7では、登場人物たちがコミュニティ FM 局を訪問して、様々な機材について局のスタッフから教わりながら放送の現場にふれるシーンを、実写動画を交えて構成している。その上で、「自ら発信すること」への興味を喚起したうえで、実際に簡単な機材さえあればミニ FM を立ち上げることができることを、「読んでスッキリ」の「ミニ FM について」では紹介している。

これらのコンテンツを活用しながら、授業のなかで、

- ① (すべてできれば地元の) 天気予報、交通情報、災害情報の実際の報道アナウンス (音源、映像) をもとに指導者が、「アナウンサーに手渡すためのメモ (最小限の情報が入っているもの)」を作り、子どもたちがそのメモを見ながら、どうアナウンスができるかを試させる。それを本物の報道シーンを再生させて、プロのアナウンスがどう優れているかを考えさせる。
- ②地元のコミュニティ FM 局に連絡をとり (あるいはキッズ・ラジスタ教材の製作者である NPO 法人市民科学研究室に連絡をとり)、とりわけ関心の高い生徒をそこに赴かせて、局によって様々な制約があることを了解した上で、現場を訪問して何らかの直接体験ができないかどうかを打診してみる。もし可能となるなら、授業の拡張として、局のスタッフと相談しつつ、そこでの学習内容を打ち合わせる。
- ③地元の行政や商店街や大学が主催するイベントなどで、子どもたち自身がミニ FM を立ち上げてレポートすることでそうしたイベントに協力させてもらうことができないかどうかを、主催者に問い合わせてみる。もし可能となるなら、その協力の体制をどう作るかを改めて一緒に検討し、子どもたちが責任をもってその役目を果たせるように、指導者がうまく導いていくことが必要になる。

といったことを実施するとよいと思われる。

Chapter 8&9

インタビュー取材をして、番組のシナリオを作ることがこれらの章の目標である。取材することに対して子どもたちに興味を持たせ、その技のエッセンスを伝えること目的に「**読んでスッキリ (15) インタビューのやり方**」「**読んでスッキリ (16) 企画書をレポート作成、感想文、作文などに応用してみよう!**」を提供している。(15) は「何をどう尋ねれば、相手からよりよい価値のある発言や情報を引き出せるか」という、きわめて多くのコミュニケーションの場での応用が見込まれる基本的な技である。また、(16) は、「自分が〇〇についてラジオ番組で (目に見えない所に相手がいる、その相手に向かって) 限られた時間で思いや考えを伝えるには」という臨み方が、じつは、レポートや感想文など多くの“作文”において、的確に内容を構成し表現を工夫していくことに直結する、という点を改めて強調している。

こうした趣旨をふまえて、授業では、

- ①例えば「1分 (あるいは30秒) トーク」という形で、「自分が読んだ (観た)、皆に勧めたい本やアニメや映画」について語らせ、その音声記録を残して、お互いにより語りとは何かを考えさせるようにする。またテーマを少しずついろいろなものに拡張し、本格的なレポート作成のテーマに近づけていく。そすることで、文章を書くことが苦ではなくなっていく可能性がある。またこのやり方の場合、実際にラジオのように、声だけが他の人に伝わるように場の設定を工夫してみると (別室にマイクを設けて、別の時間に録音して、等々)、より効果的かもしれない。

②グループで作った Chapter 5 の企画書をもとに、実際にそのグループのメンバーが、対象とするテーマで、誰に取材したらよいかを調べさせ、その取材を実行できるように、指導者の方で取り計らう。アポ取り、メモや録音の準備、質問事項、終了後の取材データのとりまとめ……等、すべてを可能な限り生徒自身で行うように仕向けることが重要である。

③②で実施したインタビューの音源も活用しながら、5分間のラジオ番組を作るとすれば、全体はどんなシナリオになるか、を生徒たち全員で考えさせる。ジングルやナレーション、場合によっては別の効果音など、リアルな番組にするための工夫をできる限り凝らしたい。教室をスタジオに見立てて、ラジオ局のスタッフの役割分担を真似て役割付をして、生徒たちが共同で番組を作る、という雰囲気を出せるようにしたい。

④もし実際に③がうまくいき、よい「番組」が出来上がったら、ぜひそれを Chapter 9 の「やってみてスッキリ」の投稿フォームを使って、NPO 法人市民科学研究室まで報告してもらいたい。地元のコミュニティ FM とのつながりがまだ持っていない場合でも、こちらのネットワークでつなぐことができる。よくできたシナリオを、地元のコミュニティ FM に紹介し、その結果、自身で作ったシナリオが、実際に電波に乗って放送されるかもしれないというチャンスを、子どもたちに提示することは、子どもたちへの大きな励みになるに違いない。

といったことを実施してもらいたいと思う。

4■コミュニティ FM について知ること

キッズ・ラジスタでは、教育関係者がコミュニティ FM とよい関係を築いて、子どもたちのコミュニケーション能力や社会性を一緒に育てていけることを構想している。

そのために、そもそも放送というものはどんな歴史をたどってきたのか、その流れのなかでコミュニティ FM はどのようにして誕生し、どんな役目を果たそうとしてきたか（これからしていこうとしているか）、を理解しておくことが大切である。

以下に掲げる文献はインターネットに公開されているものに限定したが、そうした理解の促進に役立つことができるものの一部である。

- ・「読んでスッキリ (1) 声を伝える技術・ラジオへの道 (その1) テレフォン (電話)」
「読んでスッキリ (2) 声を伝える技術・ラジオへの道 (その2) 放送する」
ともにキッズ・ラジスタ ホームページ (製作：NPO 法人市民科学研究室)

<https://www.kodomoradio.net>

- ・講座報告：災害のときのラジオ コミュニティのための番組をいかにつくるか (瀬野豪志 (NPO 法人市民科学研究室理事))

https://www.shiminkagaku.org/csijnewsletter_049_201902_seno/

- ・コミュニティ放送とは (日本コミュニティ放送協会)

<https://www.jcba.jp/community/index.html>

- ・(コミュニティ放送の)「十年史」(日本コミュニティ放送協会)

<https://www.jcba.jp/history/index.html>

- ・東日本大震災後 27 局誕生した「臨時災害放送局」の現状と課題(市村元)

https://www.kansai-u.ac.jp/Keiseiken/publication/report/asset/sousho154/154_05.pdf

- ・多様化するコミュニティ FM 放送(田村紀雄、染谷薫)

<http://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/978/1/jinbun119-09.pdf>

- ・コミュニティ FM を巡る研究視点の再整理—営利・非営利を超えた議論活性化のための一考察—(坂田謙司)

http://www.ritsumei.ac.jp/ss/sansharonshu/assets/file/2006/42-4_03-02.pdf

- ・災害時メディアとしてラジオが果たす役割 試論—コミュニティ放送の事例を中心に—(北郷裕美)

http://sapporo-otani.ac.jp/file/contents/995/8238/JFS_01_11_Kitago.pdf

- ・災害復旧・復興期における臨時災害放送局の実態研究(大内齋之)

<http://dspace.lib.niigata-u.ac.jp/dspace/bitstream/10191/47502/2/h28zik84.pdf>

- ・地方自治体の防災情報提供媒体としてのコミュニティ放送(山田晴通)

<http://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/10952/1/komyu46-04.pdf>

5 ■ ワークショップのサポートを依頼したい方はご連絡を

キッズ・ラジスタは大変目新しい教材であるだけに、ワークショップを実施するには、どの指導者にとっても敷居が高いように感じられるかもしれない。この教材の製作者である NPO 法人市民科学研究室では、そうした方々へのサポートを行うことを、今後の重要な役割であると考えている。ウェブの内容を含めて、前向きに取り組んでみたい方々からのどのようなお問い合わせにも対応していく所存である。以下にご連絡ください。

NPO 法人市民科学研究室

〒113-0034 東京都文京区湯島 2-14-9 角田ビル 2F

TEL: 03-5834-8328 FAX: 03-5834-8329 Email: renraku@shiminkagaku.org